

忖度について — 負のイメージを背負った言外の意味⁰ —

山 本 英 一

(関西大学)

1. はじめに

「忖度」という言葉が流行りである。たかだか「他人の心中をおしはかること。推察」（広辞苑）と定義されるにすぎない、それもふだん馴染みのなかった漢語が、ここまでも人口に膾炙するに至った経緯は、誰もが知る通り、国有地の売却絡みで、政治絡みの怪しい取引が行われたという文脈で、まさに渦中の人物が用い、これをマスメディアが連日これでもかこれでもかと繰り返し流し続けたからである。おかげで、2017年の「新語・流行語大賞」の年間大賞にまで選ばれ、にわかに脚光を浴びる言葉にまで昇格した。

もちろん本稿は、背景にあるかも知れない政治家や官僚の思惑に関心もなければ、この不正を何とか白日のもとに晒そうというマスメディアの正義感にも関心はない。ただ、元来この語の意味である「他人の心中をおしはかること」、そこから「(言葉には現れない)他人の胸中に去来するメッセージを読み取ること」は、日本語に限らず英語にも、そしてどの言語にも共通する、言語学、もしくはコミュニケーション学の重要な関心事に他ならないことを明らかにしたい。いわば、普遍的な言語現象なのである。にもかかわらず、<空気を読む>という、これまた日本的ステレオタイプに事寄せて、<忖度する>もまた「日本の組織の功罪」であるとか¹、「ニッポンにマンエンする『ビョーキ』」²など、またぞろ「日本人(日本語)特殊論」ごとき、お手軽・お気軽な論評が文字通り蔓延しているのが実情である。言語あるいはコミュニケーションを研究する立場から、これらがナンセンスな議論に過ぎないことを例証することが本論の目的である。

2. コノテーションと意味・用法の変化

<忖度(する)>という語を扱うにあたって、ひとこと触れておかなければならないことがある。ここでは、わかりやすい例として<更迭(する)>を考えてみよう。広辞苑によれば、「役目や職などについている人があらたまりかわること。前任者がやめて新任者が位置につくこと。また、役職の人を改め変えること」である。一方、マスメディアでは、「失言の責任を問うて、首相は法務大臣を更迭した」という使い方が一般的である。つまり、定義上は<中立的な>意味であるにもかかわらず、実際の用例は<負の>意味を帯びて使われ、そしてそのように理解されている。このような<負の>意味(あるいは、逆に<正の>意味)は<コノテーション>(connotation)と呼ばれる言外の意味の一種とされる³。<更迭(する)>は、実際に使われるうちに、<負の>意味を背負うような形への変化が起こっている。

<付度(する)>もまた、辞書の定義上は<中立的な>意味であるにもかかわらず、今般のように、文脈が限定された、しかも急激な頻用を通して、「相手の気に入られるよう(メッセージ)を読み取る」という意味、さらには「相手に気に入られようとして(誰かを)ヨイショする」という意味に変質してきている。(相手が誰であれ)「相手に気に入られよう」とすることは姑息な態度のあらわれであり、<付度(する)>ことは、卑しまれるべき行為として<負の>レッテルを貼られ、意味の変化が起こった。しかも、変化はそればかりではない。本来であれば、「人の思いを推察する」という意味で、「○○の思い(気持ち)を付度する」というべきところを、「誰かに取り入る、誰かにヨイショする」という表現の類推からか、「アメリカに付度し続ける日本」⁴というアクロバティックな用例まで目にするようになった。

これを誤用として退ける気は毛頭ない。言語(表現)は絶えず変化するものであり、<付度(する)>は、元来はなかった負のコノテーションを帯びるにとどまらず、その意味が優勢になることで構造上の(コロケーションの)変化まで引き起こしたのである。その事実を、ここでは確認しておきたい。

3. 推意受信としての<付度>

さて、冒頭でも述べた通り、<付度(する)>は普遍的な言語現象である。相手の心中(こころ)を察するわけなので、言語(関連)活動といったほうが正確かも知れない。つまり、明示的なメッセージとしては現れない、相手の心中(こころ)を探り、その真意を読み取るという、きわめて高度のテクニックを要する行為なのである。それでいて、ごく日常的な談話の中に立ち現れるのは、以下の例をみれば歴然としている。

(1) *This interaction occurred during a radio interview with an unnamed official from the United States Embassy in Port-au-Prince, Haiti:*

Interviewer: Did the United States Government play any part in Duvalier's departure? Did they, for example, actively encourage them to leave?

Official: I would not try to steer you away from that conclusion. ⁵

インタビュアーが発した、「アメリカ政府が積極的に今回の案件に関与したのではないか」との強い疑念を、肯定も否定もしないで、高官は「そう思いたかったらご勝手に」とだけ答えている。だからといって、インタビュアーは「それでは答えになっていない」といつて食い下がりはしない。「そうか、断言はしないけれど、限りなくイエスなんだな」と推論する、つまり<付度する>のが、いわば大人の会話のお約束だからである⁶。

しかし、これは大人の会話に限った話ではない。

(2) *Some years ago, I went to say with my brother and his family, including his son, aged about 5. I had with me an electric toothbrush, into which I had recently*

put new batteries. My brother asked to see the toothbrush, but when he tried to operate, it would not work.

Me: That's funny. I thought I put in some new batteries.

Nephew: *[Going extremely red]*: The ones in my engine still work.⁷

なぜか動かない電動歯ブラシを見て、「おかしいな、新しい電池入れたはずなのに」と言った私に対して、「ぼくの玩具の電池はまだ大丈夫だよ」と真っ赤な顔をして応じる甥とのやり取りである。この例のおもしろいところは、私が独り言のようにいった発話を、「新しく入れたばかりの電池を誰か古いのと入れ替えただろう！」という意味で読み取り、「(ぼくの玩具の電池はまだ大丈夫) だから、入れ替えたのは僕じゃないよ！」と甥が応酬している点である⁸。つまり、5才の甥は、「電池を入れたはず」という発話から、「誰かが怪しい」という私の心中(の思い)を、まさしく<付度した>のである。

このように、<付度(する)>は、大人の会話に限定されるわけではないし、ましてや日本語だけに特徴的な現象でもないことは明らかであろう。

4. 推意の定義と取消可能性

(1)、(2)の例文からもわかるように、付度にかかわる部分は<文字通りの意味>(Literal meaning)をもとに、聞き手が文脈を考慮しながら<推論して>(Infer)導き出した意味である。以下の(3)、(4)の訳文は、文字通りの意味である。

(3) I would not try to steer you away from that conclusion.

(そういう結論を下さないように、あえてあなたを導こうとは思わない)

(4) I thought I put in some new batteries

(新しい電池を入れたと思った)

文脈によっては、これで事足りることもあり得るが、「相手はなぜそんなことを言ったのだろう」と考えたくなる場合もある。(1)、(2)の例は、まさにこの後者に該当する。(1)では、質問に対して「はい」か「いいえ」で簡単に答えられるところ、「わざわざ回りくどい言い方をしたのはなぜか」という心に引っかかる思い。(2)では、内緒で電池を入れ替えたやましい気持ちを持つ5才児にとって、「おじさんはなぜそんなことを呟いたのか」という思い。それぞれ、その思いがきっかけとなって「なぜ」に対する答えを見つけよう(考えよう)とするのが、年齢の長幼を問わず人情というもののようなものである⁹。解を求めて考える(=推論する)ことで、「アメリカ政府が関与したと思いたかったらご勝手に！」(=1)、「誰か古い電池と入れ替えただろう！」(=2)というメッセージに、それぞれ辿り着くことになる。これらは、推論を経て導き出した意味ゆえ、<推意>(Implicature)と呼ばれている。この解を求めて考える(=推論する)行為が、まさにいま問題となっている<付度(する)>そのものであり、読み取ったメッセージは<推意>にほかならない。

さて、ここで注意しなければならないことがある。(5)の例を考えてみよう。

(5) *A and B are sisters. A is getting ready for a job interview:*

A: Did you get your velvet jacket back from the cleaners?

B: You're NOT borrowing it.

A: I don't want to borrow it. I just wondered if you' got it back.

B: You just wondered!

A: Well, I haven't got anything decent to wear! ¹⁰

妹 (A) の「クリーニングからベルベットのジャケットは戻ってきた?」という質問から、姉 (B) は「ベルベットのジャケットを貸してくれない?」という<推意>を読み取る。「貸さないわよ」という発話は、まさにそれに対する答えである。ところが、妹 (A) は「誰も貸してくれとは言っていないじゃないの。ただクリーニングから戻ってきたかを聞いただけよ!」と応酬する。つまり、姉 (B) は勝手に邪推しただけで、そのようなく推意>は最初から存在 (意図) していないと取り消しているのである¹¹。このようなく推意>とは、推論の上に成り立つ意味であるがゆえに、時として間違っている可能性がある。これは<取消可能性> (Defeasibility) と呼ばれ、<推意>の特徴とされる¹²。

5. 推意・忖度に依存するわけ (1)

このように、読み取ったメッセージとしての<推意>は、話し手の側で、いわば一方的に解除することができる。これは円滑なコミュニケーションの阻害となることは明らかである。にもかかわらず、話し手が<推意>に依存し、聞き手もこれを良しとして許容するのはなぜだろう。

この問題を考えるにあたり、外交絡みの(1)の例は示唆的である。この発話の推意は、「アメリカ政府が積極的に今回の案件に関与したと思いたければご勝手に」であった。高官が匿名でインタビューに応じていることから推察されるように、他国の内政への干渉を匂わせることは、かなりデリケートな問題を孕んでいて、発言には細心の注意が要求される¹³。その一方で、他国の内政とはいえ、為すすべもなく傍観していたと解されるとアメリカの沽券にもかかわる。(1)の推意は、相互に矛盾しあうニーズを天秤にかけた末の、究極のメッセージなのである。しかも、後日になって (万が一) 「あなたはアメリカ政府の関与を認めただけではないか」と責められとしても、「そんなことを言った覚えはありません。あなたの勝手な憶測にすぎません」と非難をかわすことができる。まさに、推意とは<取消可能>だからである。

もう一つ例を考えてみよう。

(6) A: Can he be trusted?

B: He's on the payroll for fifteen years and his wife is proving rather expensive.

J. Archer, *Honour among Thieves*

ここでは、ギャングのボス (A) が部下 (B) に対して「ある人物の信頼性」を問うている。

本来であれば、Yes (信頼できる) か No (信頼できない) のいずれかで答えるべきところである。しかし、あえて「15年も一緒に仕事をしているし、奥さんは金遣いが荒いようだ」と答えたのはなぜか。当然のことながら、談話として成り立つには、ここで聞き手に推論が求められる。すなわち、「(15年の実績があり、経済的にも物入り) なので、彼は組織を裏切るようなことはしないだろう」という結論に至るプロセスが必要となる。この結論は、まさに推意であり、推意は<取消可能>である。したがって、万一、問題の人物が組織を裏切ったとき、「お前は信用できると言ったではないか」とボスに迫られても、部下は「そこまで言った覚えはありません」と言い逃れができる。部下が、単刀直入な Yes/No ではなく、回りくどい言い回しを用いた所以である¹⁴。

(1)や(6)の例からわかるように、<推意>に依存する(少なことも)一つの理由として、白黒ははっきりさせる物言いで、みずからを抜き差しならぬ状況に置くことを避けたいという、発話者側の気持ちが働いているといえそうである。

6. 推意・忖度に依存するわけ(2)

私たちが<推意>に依存するのは、いわば言い逃れがしたいという姑息な事例に限られるわけではない。(7)の例を考えてみよう。

(7) *A man and a woman enter an art gallery. The man is carrying a plastic carrier bag. The woman goes to buy the admission tickets, while her husband has gone ahead into the gallery.*

Official: Would the gentleman like to leave his bag here?

Woman: Oh no, thank you. It's not heavy.

Official: Only ... we have had ... we had a theft here yesterday, you see. ¹⁵

表向きは「ここにバッグを置かれますか？」という質問になっている係員の言葉ではあるが、裏には「このバッグをお預けください」というリクエストが推意として意図されている。ところが、この曖昧な物言いによるコミュニケーションは奏功せず、夫人は「ありがとう、大丈夫よ。重くないから」と、表向きの質問に答えるにとどまっている。困った係員は、「実は、昨日ここで盗難があったので(バッグはお預けいただきたいのです)」と種明かしをする。何とも歯切れの悪い発話であるが、うまく意図が伝わらない危険まで犯して、どうしてこんなに遠回しな言い方をするのであろうか。端的に“Leave your bag here”と行ってしまえば済む話なのに。

ここが対人コミュニケーションの難しいところである。しかも、(7)の例は、美術館の職員と訪問客のやり取りであり、いわばポライトネス(丁寧さ)が求められる典型的な場面でもある。したがって、ここでは、言語学で一般的なポライトネスの枠組みに触れておく必要がある。すなわち、私たちはみずからの行動を制約されたくないという欲求と、周りの人たち誰からも愛されたいという欲求を持っていると考えられている。Brown & Levinson (1987:55-71) はこの欲求を<フェイス>(Face)と呼び、特に前者を<ネガティ

ブ・フェイス> (Negative face)、後者を<ポジティブ・フェイス> (Positive face) と命名し、相手の<フェイス>の脅威となる行為 (Face-threatening Acts (FTAs)) となることが予想される場合は、言語表現上これを回避あるいは緩和する工夫が必要だと考える。

貴重品が入っているかも知れないバッグを置くように求めることは、「行動を制約されたくない」という相手側の<ネガティブ・フェイス>を脅かす。他方、盗難の嫌疑をかけられるということは、「人から愛されたい」という相手側の<ポジティブ・フェイス>をも脅かす。つまり、話し手は相手の<フェイス>の脅威となる行為 (FTAs) を通して、みずからをのっぴきならぬ状況に追い込むことになるのである。万が一の場合、言った覚えがないと<取消可能>でもある推意に依存することは、FTAs をオブラートに包む絶好のオプションといえるだろう。

7. いま話題の<忖度>の特殊性

ここまで、相手が意図したメッセージを<推論する>という点に注目して、<忖度>を<推意>と等価なものとして議論を進めてきた。しかし、推論行為は共通項ではあるものの、正確には両者は異なるものともいえる。なんとなれば、ここしばらく、政界絡みで世間を賑わしている<忖度>とは、次のような文脈で使われているからである。すなわち、参与者 A (首相)、参与者 B (首相夫人)、参与者 C (官僚) がいて、参与者 C が、参与者 B の言葉を介して (= a)、あるいは直接的に (= b) 参与者 A の心の内を推論したのである。(a) の場合、問題となったのは「ここはいい土地ですね」という参与者 B の発話。一方、(b) の場合、参与者 A の明示的発話はないとされる。(a) にせよ、(b) にせよ、最終的に問題となっているのは、参与者 A の「土地取引において、特定の第三者に配慮されたし」というメッセージを、参与者 C が推論により引き出した、すなわち<忖度>したこととされる。議論の都合上、<推意の構図>と対比させて考え、これを<忖度の構図>と呼ぶことにしよう。

ここで思い出したいのは、<推意>に関する議論の対象となったのは、話し手 A の発話の意図を、聞き手 C が推論により理解した点である。一方、<忖度の構図>では、少なくとも言葉が介入しているレベルでは、(参与者 A の配偶者である) 参与者 B の発話を通し

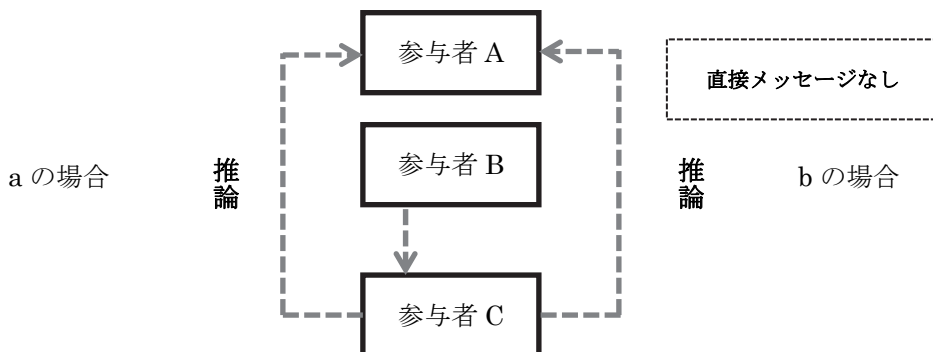


図1 忖度の構図

て、参与者 A の意図を、参与者 C が推論している (a の場合)。もしくは、言葉は介入していないが、参与者 A の意図を、参与者 C が勝手に推論している (b の場合)。この構図を図示すると、図 1 のようになる。

一方、すでに明らかなように、推意の場合、参与者 B は存在せず、明示的なメッセージを発する話し手 A と、それを受け取る聞き手 C のインタラクションのみが存在する (図 2)。

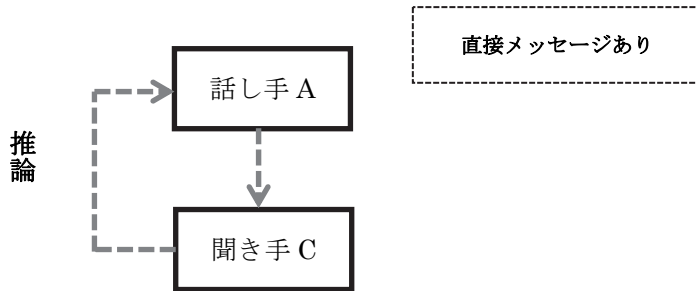


図 2 推意の構図

推意の構図では、推論の引き金となる言語メッセージが必ず要求されるので、〈話し手〉、〈聞き手〉という呼び名を使ったが、付度の構図では、むしろ言語メッセージはブランクのままである。あえて、〈参与者〉という呼び名を用いたのは、そのためである。このようにして、推論を介するとはいえ、基本的には本人の発話を聞かずして、あるいは、せいぜい別の人物の発話をもとに、その人の意図 (もしくはメッセージ) を読み取るところが、〈付度〉の特徴であり、同時に特殊な点だともいえるだろう。

ここで、最後に思い出しておきたいことは、推意の〈取消可能性〉という性質である。これは、推意というものが、聞き手側の推論を介して得られる意味であるがゆえの特徴であった。付度もまた、推論を介して得られる意味である。しかも、一方の参与者 (聞き手ではない!) が、明示的な発話を経ずして、推論により導き出すメッセージであることを考えると、「発信人」と目される参与者が、これを強く否定する (= 取り消す) ことができる。そういう推論が一人歩きするような構図ができあがってしまうこと自体は、(とりわけ倫理的に) 健全なこととはいえないけれども、意図を察するという行為に依存することは、情報は流したいけれども責任の所在は曖昧にしておきたいという、いわば大人の会話 (例文 1、6) や、ポライトネスが要求される場面 (例文 7) では、きわめて有効であり、言語の別を問わず、コミュニケーションの現場に遍在する現象といえる。

8. まとめ

「他人の心中をおしはかること」という意味の「付度」は、英語では *infer* に相当するような言葉であった。それは、言語学、とりわけ語用論の話題となる〈推意〉とも重なるものであり、上の議論からは、英語であれ、日本語であれ、対人コミュニケーションを円滑に進める上では、きわめて有効なレトリックともいえることがわかった。ただし、この数年、日本のマスメディアで多用されることで、ちょうど「更迭 (する)」という言葉がそ

うであったように、負のコノテーションを背負うことになった。すなわち、「(一般的に自分よりも上位にいる人に気に入られようと、その) 人に取り入る」という言外の意味である。さらに、そこから、本来は「人の心・意図を付度する」であったはずのコロケーションにまで影響が生じ、おそらく「人に取り入る」の連想から、「人に付度する」という言い方まで散見されるようになった。しかし、「付度」の中核となる意味そのものは、相手の意図を推論するということであり、本稿で明らかになったように、それは「推意」の延長線上にあるものである。また、そういった推論を巻き込んだ言語現象、あるいは対人関係を睨みながら、時としてその場の<空気を読む>ことは、何も日本語に限られたことではない。責任回避やポライトネスは、むしろ普遍的な問題であり、<取消可能性>という特性が、そこではきわめて重要な役割を演じている。とりわけ、責任回避のレトリックは、これまたフェイクニュースなどという言葉が乱舞する現代にあっては、非常にタイムリーな話題でもある。いわゆる<欺瞞の談話> (Deceptive discourse) は、<付度>や<推意>の理解なしには語るができない。そのことを示唆した上で、本稿の結びとしたい。

脚注

0. 「付度」という語は、中国最古の詩集「詩経」に「他人に心有れば、予(われ)之(これ)を付度す」とある。
1. 榎本(2017)。
2. 鎌田(2017)。
3. “... a particular word has a pleasant or desirable connotation. In this usage, the connotation of a word is thought of as a(n) emotive or affective component additional to its central meaning.” (Lyons 1977:176)。
4. 鎌田(2017:176)。
5. Thomas(1995:71)。
6. あるインタビュアーの「あなたはセクハラ問題に厳格だと思いますか」との問いに、某大臣が「そう思います」と答えたのに対して、インタビュアーは「セクハラ問題に厳格ですか」と再度問う。某大臣は、「そう思いますといえば、答えは明白でしょう！」と苛立ちを隠さず切り返す。もちろん、「本当にそうなの？」という言外の意味も読み取れるが、他方で失言を繰り返す大臣から、さらなる失言を引き出そうとするインタビュアーの魂胆が見え見えである。聞く方も聞く方だが、答える方も答える方である。双方ともに、誠に稚拙なコミュニケーション手法の見本であり、大人の会話の真逆ともいえる。
7. Thomas(1995:59)。
8. この例のさらにおもしろいところは、私の発話は相手に対する<非難>(Accusation)として、そして甥の発話はそれに対する<否認>(Denial)として、それぞれ機能している点でもある。表面上は<平叙文>(Declarative Sentence)にすぎないものが、文脈を与えることで(<非難>・<否認>という)<発話行為>(Speech Act)として働いている点である。発話行為については、Searle(1979)を参照のこと。

9. 紙面の都合もあり、ここでは<推意>が生み出されるプロセスについては詳述しない。「相手はなぜそんなことを言ったのだろう」と思わせるきっかけとなるのが、Grice (1989:26-30) のいう<量> (Quantity)、<質> (Quality)、<関係> (Relation)、<様態> (Manner) の4つで構成される公理 (Maxims) の存在と、相手にそれとわかる公然たる違反 (Flouting) である。回りくどい表現を含む、例 (3) は<様態> 公理への違反であり、なぜそんなことを呟いたのかと思わせる、例 (4) は<関係> 公理への違反と考えられる。
10. Thomas (1995:83)。
11. この例のおもしろいところは、妹がいったん推意を取り消しながら、直後に「まともな服がないんだもの (貸してくれたっていいじゃない) !」と本音を言っている (つまり、<推意> が実は正しかった) 点である。
12. Thomas (1995:82-84)。あるいは、Cancelability と呼ばれる (Grice 1989:44-46)。
13. ジャーナリズムに見られる、このような物言いの一種に「コメントを差し控えさせていただきます」がある。これは、先の Grice の4公理遵守からの<選択的離脱> (Opting out) と呼ばれている。Thomas (1995:74-76) を参照のこと。
14. <尺度の推意>の観点から、この種の発話を分析した山本 (2002:41-43) も参照されたい。
15. Thomas (1995:50)。

参考文献

- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.
- Grice, P. (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press.
- Lyons, J. (1977). *Semantics, Vol. 1*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1979). *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*, London: Longman.
- 榎本 博明 (2017). 『付度』の構造 空気を読みすぎる部下、責任を取らない上司 (イースト新書).
- 鎌田 實 (2017). 「付度バカ」 (小学館新書).
- 山本英一 (2002). 『順序づけ』と『なぞり』の意味論・語用論、大阪: 関西大学出版部.